

嗅覚表現名詞カ・ニホヒの史的変遷

—その交替に着目して—

池上 尚

【キーワード】 感覚表現 語彙史 意味変化 意味の上昇 意味の下降

1 はじめに

現代語のニオイは、〈プラス／中立的／マイナスの意味〉（以下、〈＋／*n*／－の意味〉）すべてを表す嗅覚表現名詞（以下、名詞）である。しかし、古代におけるニホヒは1語単独で〈＋の意味〉を表す名詞であり、〈＋／*n*／－の意味〉すべてを表していたのはカであった。¹ 本稿では、この2語の交替がいつどのように生じたのかに着目し、ニホヒが〈*n*／－の意味〉をも表すようになるまでの〈意味の下降〉と、〈＋／*n*／－の意味〉を表していたカが衰退していく過程とに、どのような相関関係が見出されるかを考察していく。

2 用例²の分類基準 —表す意味の認定—

名詞が〈＋／*n*／－の意味〉のいずれを表すかは、形式（修飾成分の有無）と対象（嗅覚刺激を発している事物）とによって判断する。

まず、形式により、①単独使用、②a 〈＋の意味〉を表す修飾成分を伴う、②b 〈－の意味〉を表す修飾成分を伴う、に3分類する。①のうち、対象が穢れ・禁忌とされるもの（死人・排泄物等）や獣の場合のみ、名詞は単独で〈－の意味〉を表すと考える。これら以外が対象の場合、積極的に単独で〈－の意味〉を表しているとは考えにくく、名詞は単独で〈＋の意味〉を表すと暫定的に考えた。も

¹ これについて、『今昔物語集』の用例を中心に扱った工藤(2010)がある。ここでは、それを参考にしてさらに広く用例を集め、振り仮名の付されていない「香」の扱いについても慎重を期して考察した。

² 漢字表記「香」は、和歌など音節数に制限のある箇所において、*い* 音節と読んでしかるべき場合に限りカと読み、残りはすべて読み不明の用例として処理した。また、その他の漢字表記例（「薫」「臭」など）は考察の対象から外した。

なお、ニホヒの用例数には、「襲の色目」（中古18例・中世前期45例・中世後期4例）や「匂い威」（中世前期9例・中世後期2例・近世前期1例・近世中後期1例）を指す場合も含めた。ニホヒがこれらの意味を有することからも、この語が視覚的な意味をも表し得たことは明らかである。本稿は、視覚表現と嗅覚表現とに連続性・共通性を見出す立場をとるため、視覚表現的であるこれらの用例も含めて「嗅覚表現」として論ずる。

もちろん、単独で〈+の意味〉を表すと考えたものの中には〈n/ーの意味〉を表すものが含まれている可能性もある。しかし、対象への現代的な評価は避けるべきであるし、対象とそののにおいに対する個人的な嫌悪まで推測することは難しい。そこで、本稿では、「明示的な言語表現を判断基準に〈n/ーの意味〉を表していると積極的に認められるもの」に焦点化して考察を進めていく。

②a・bの修飾成分は「名詞を詳述している評価性を持つ語句」を指す。これには、名詞を修飾する連体修飾語句（例：悪しきニホヒ）だけでなく、名詞を主語とする述語句（例：カの香ばしき）も含めた。②a・bの場合、修飾成分が〈+／ーの意味〉を表す役目を担うため、名詞自体は〈nの意味〉を表すと考える。

表1 〈+／n／ーの意味〉の捉え方

形式		名詞の意味	表中での略称
①単独で使用されているもの		+	単独+
②修飾成分を伴うもの	a〈+の意味〉を表す修飾成分	n	修飾成分+
	b〈ーの意味〉を表す修飾成分		修飾成分ー
①単独で使用されているもの		ー	単独ー

本稿では、【表1】の太字部分に注目して〈意味の下降〉を追っていく。1語単独で〈+の意味〉を表していた名詞が、〈ーの意味〉を表す修飾成分を伴い、名詞自体は〈nの意味〉を表す(②b)ようになれば、この段階で〈意味の下降〉が生じていると考える。³さらに、〈ーの意味〉を表す修飾成分を伴わず、1語単独で〈ーの意味〉を表すようになれば、〈意味の下降〉は定着したと見る。つまり、「〈意味の中立化〉を〈意味の下降〉の一段階として捉える」ということである。⁴

3 調査結果と考察

用例の得られた言語資料の詳細(【表2】)と、その調査結果を資料ジャンルごとにまとめた全体表【表3】とを末尾に示す。時代は、中古／中世前期／中世後期／近世前期(～享保10年(1725))／近世中後期の5つに区分した。それぞれに含ま

³ ②bを後続文脈中において1語で換言する名詞は単独で〈ーの意味〉を表すと考える。「山フトコロラスギ往間、人ハルカナタエタル所 エモイハズ嗅^{クサキ}香ス。……アヤシサニ強ヨリテミレバ、一人死人アリ。「コレガ香ナリケリ」(打聞集・第九話・玄奘三蔵心経事)〔京都国立博物館蔵本『打聞集の研究と総索引』清文堂出版1980〕〔説話〕※この場合、読み不明の“香”という扱い

また、②aは、より一層“快いにおい”であることを表している可能性もあるため、積極的に〈意味の下降〉として捉えることはしない。

⁴ 〈意味の上昇・下降〉の捉え方については小野(1984)を参考にした。

⁵ 年代よりも資料ジャンルでまとめることを優先したため、近世中後期には1710年代に成立したものも僅かながら含まれる。

なお、上代の『万葉集』にはカ3例・ニホヒ11例があるが、専ら単独で〈+の意味〉を表しており、〈ーの意味〉を表す用例はなかったことをここに補足しておく。

れる和歌・謡などの韻文の用例数は括弧内に示した(内数)。また参考として、それぞれに含まれる「色との共起例」⁶も表の右端に内数として掲げ、カヲリ⁷や複合名詞・慣用的表現である色香・移り香・梅ガ香については別に数えて示した。

以下に用例を掲げる際には、調査語に傍線、修飾成分に波線を付し、出典末尾に使用した底本を〔 〕、その資料ジャンルを〔 〕で示した。引用に際して調査対象語以外の表記を私に改め、補足した部分は〈 〉で括った。

3.1 中古

中古において単独で〈-の意味〉を表しているのはカのみである。〈-の意味〉を表す修飾成分を伴うものも1例ながらあり、この頃、カが〈+／n／-の意味〉すべてを表し得る名詞であったことが分かる。

(1) 「月頃、風病重きにたへかねて、極熱の草葉〈=にんにく〉を服して、いと……
くさきによりなむ、え対面給はらぬ。まのあたりならずとも、さるべからん
雑事等は、うけ給はらん」……「このか失せなん時に、立ち寄り給へ」(源氏
物語・帯木)〔新日本古典文学大系(以下、新大系)〕〔仮名散文I期〕

(2) 〈女子〉父君に尿多にしかけつ。宮に「これ抱き給へ」とてさし奉り給へば
「あなむつかし」とて押し出で、うちしもへむき給ぬ。君「頼しげなの人の
親^(父)」内侍のすけにさし取らせて拭はせ給。宮「いかにかくさからん。あ
なむつかしや」とてむつかり給。(宇津保物語・くさびらきの上)〔前田育徳
会尊経閣文庫蔵本『宇津保物語本文と索引』笠間書院1973〕〔仮名散文I期〕
ニホヒは、単独で〈-の意味〉を表すまでには至っていないものの、〈-の意
味〉を表す修飾成分を伴い〈nの意味〉で使用されるようになっており、中古の
段階で既に〈意味の下降〉は始まっていると考えられる。

(3) 〈御装束〉焼けとほりて、疎ましげに焦がれたるにほひなども、異様なり。
(源氏物語・真木柱)〔新大系〕〔仮名散文I期〕

読み不明の“香”には、〈-の意味〉を表す修飾成分を伴うものが1例ある。

(4) 〈「樞戸の廂二間ある部屋の、酢、酒、魚など、まさなくしたる部屋」に閉
じ込められた〉君は、萬に物の香くさくにほひたるがわびしければ、いとあ
さましきには、涙もいでやみにけり。(落窪物語・巻一)〔日本古典文学大系(以
下、旧大系)〕〔仮名散文I期〕

嗅覚表現自動詞は、「ニホヒがニホフ」「カヲリがカヲル」のように、それ自身
の連用形が名詞化した語を主格にとることはない。よって、(4)の「香」をニホヒ
と読むことはないと考えられる。また、カヲリには1例のみ、例外的に〈-の意

⁶ 多く「色も～も」の形で、名詞が「情理・風情」を表す表現である。ここでは、〈+の
意味〉として処理した。

⁷ 中世後期頃には雅語化(『日葡辞書』(1603)がカヲルを「詩歌語」と記述)し、専ら単独
で〈+の意味〉を表す名詞として現代に至る。

味)を表す修飾成分を伴うものがある(後述)が、基本的には単独で〈+の意味〉を表す名詞である。従って(4)の「香」はカと読む可能性が非常に高いと言えよう。

3.2 中世前期

中世前期において単独で〈-の意味〉を表しているのは、ニホヒと読み不明の“香”のみであり、カ^{ニホヒ}の確例はない。ニホヒの〈意味の下降〉は前代において既に始まっており、中世前期末(5)に至り、単独で〈-の意味〉を表すまでにその意味変化は進行している。また、〈-の意味〉を表す修飾成分を伴うニホヒもあり、〈+/n/-の意味〉すべてを表し始めたのは中世前期末であったと考えられる。

(5)若キ女房、礼盤近ク居テ、眠リケルガ、堂ノ中モ響ホドニ、下風 (=放屁)

ヲシタリケルガ、香モ事ノ外ニ^{ニホヒ}匂テ、興サメタル所ニ、導師是ヲ聞テ、「…
…今ノ御下風ニヲキテハ、聲モアリ。匂モアリ、聞ベシ」

(沙石集・巻六・八) [旧大系] [説話]

さらに、この頃の特徴として、読み不明の“香”の多さが挙げられる。100例を超える“香”は一体何と読めばよいのであろうか。ここで、カとニホヒとの用例数に着目してみる。ニホヒの用例数を中古と中世前期とで比較してみると、236例：232例とほぼ同数で、特に目立った増減は見られない。これに対し、カは102例：43例と、用例数の半減していることが分かる。中古において〈+/n/-の意味〉すべてを表す中心的な名詞であったカが、中世前期に至り突然使用されなくなったとは考えにくい。もしカが何らかの理由で使用されなくなったのであれば、それに代わる名詞が必要であろう。ところが、ニホヒは中世前期末にならないと、単独で〈-の意味〉を表す確例が見られないのである(5)。〈+/n/-の意味〉すべてを表す中心的な名詞が一時期不在であったと考えるよりも、前代に引き続き、中世前期においてもカがその役目を担っていたと考える方が自然であろう。中世前期の読み不明の“香”は、カのように〈-の意味〉を表す修飾成分を伴ったり、単独で〈-の意味〉を表したりしている。一見して減ったかのように見えるカは、「香」と表記され使用され続けていたと考えられないであろうか。⁸この頃、〈n/-の意味〉を表す名詞としてカがニホヒより優勢であったこと、「香」をカと読む可能性の高いことについて、『名語記』(1268)の記述が参考になる。

「問 香氣アル物ヲ善悪ニツケテ……カトオツク如何 答 カハ香也 クサ反レハカトナル コノ字 好香鼻香ノ差別ハアレトモ イツレモクサノ心ハカラサル也」(名語記・巻二) [勉誠社 1983]

⁸ ニホヒには固定的用字「匂」があり(「匂」はニホフのために作られた国字である(朱 1998 など))、「香」がニホヒの用字として多用されていたとは考えにくい。『色葉字類抄』(前田本上 39オ3)、『類聚名義抄』(観智院本仏中ノ12など)を参照してみても「香」の字にニホフ・ニホヒの訓は見られない。時代の下る『和玉篇』(慶長刊本中 173)には見られるが、節用集(文明本・明応五年本・天正十八年本など)にはない。

以上のような記述からも、中世前期においても引き続き、カが〈+／n／-の
意味〉すべてを表す名詞として多用されていたことが証明されよう。

3.3 中世後期

中世後期の特徴は、単独で〈-の意味〉を表す名詞が一時的に用例未見となっ
ていることである。⁹また、〈-の意味〉を表す修飾成分を伴っているのは、ニホ
ヒのみのようである。

- (6) 草々のみどりの色あざやかに見るといへども、手に取る時ハ^{ニオイ}匂ひあしく鼻
を穿つ事あるごとく、世界の栄花も遙かに詠めやる時ハ如意満足の粧を頭ハ
すといへども内証に近付てハ皆そらめなりといふ事を弁ふべし

(ぎやどぺかどる) [清文堂出版 1987] [キリシタン資料]

カは、18 例中 17 例が単独で〈+の意味〉を表している。たとえ読み不明の“香”
30 例すべてがカであっても、この頃〈-の意味〉を表す修飾成分を伴うカが（一
時的ではあるものの）見られなくなっていることに変わりはない。カは、そのほ
とんどが単独で〈+の意味〉を表す用例で、〈+の意味〉を表す修飾成分を伴うも
のも以下の 1 例のみである。

- (7) 醃ヒシフヒシフヒシフ 醃 醬……何ヤラ、^(かうばしカ)香 イウマサウナカ、スルトテ……何サマヨイ
匂イカスルトテ窺ソ (古文真宝彦龍抄・二十七ウ) [『続抄物資料集成 10』清
文堂出版 1992] [抄物]

ところで、ニホヒとカとの明確な使い分け意識は存していたのであろうか。(7)
では、カがニホヒによって換言され、2 語はほぼ同義で使用されているようであ
る。〈+の意味〉を表す修飾成分を伴っている点も共通している。しかし、『羅葡
日辞書』(1595)における 2 語を参照してみると、この頃既に、カが〈n の意味〉
を表す名詞としては衰退していることが分かる。他の語の語釈における 2 語を見
ると、〈+／-の意味〉を表す修飾成分を伴うのはニホヒだけなのである。

「Suavis ……Amaqi mono, agiuai yoqu, niuoi yoqi mono.—qini aitaru coto.」

「Oboleo……Axiqi niuoiuo fassuru.—niuoiiga aru, suiriō itasu.」

[『ラホ日辞典の日本語 本文篇』勉誠出版 2005]

さらに、『日葡辞書』(1603)を参照してみると、カは「*cheiro, ou perfume.*(=匂
い, または, 芳香.)」、ニホヒは「*chiero.*(=匂い.)」とある。¹⁰ 語ともに〈n の意味〉
を表す名詞として認識されながらも、カにのみ「*perfume.*」とあり、この語が単
独で〈+の意味〉を表す名詞であることを強調していると解釈できよう。

以上から推測するに、中世後期は、カが中心的な名詞として優勢であった前代
までの言語意識を保存している言語資料もあれば、カよりもニホヒを多用するよ

⁹ 直接的に〈-の意味〉を表すクササ・クサミ等が増加するわけでもない。中世後期に
おいてクササは 3 例、クサミは 1 例が得られた。いずれも抄物の用例である。

¹⁰ 語釈は『邦訳日葡辞書』岩波書店 1980 による。

うになる、より近世的な言語意識を反映している言語資料もあるといった、転換期の様相を呈していると考えられる。

3.4 近世前期

近世前期においては、カもニホヒも〈+／n／－の意味〉すべてを表す名詞として使用されている。しかし、〈n／－の意味〉を表す用例の総用例数に対する割合を比較すると、ニホヒが優勢であると言える。

まず、狂言台本に着目してみると、ニホヒとカとの間に明確な使い分け意識の存していたことが窺える。狂言台本Ⅰ期におけるニホヒは、謡・ト書きに僅かに使用されながらも、そのほとんどがせりふでの使用である。これに対し、カは全5例中、謡での使用が4例、せりふでの使用は僅か1例である。このせりふの例(8)も、ニホヒを繰り返し使用することを避けた結果、カが使用されたと思われる用例である。せりふで多用されるニホヒの方が、一般的に広く使用されていた名詞である可能性が高い。中世後期の口語を保存するとされる狂言台本においてこうした使い分け意識の見られることから、前代の中世後期はまさに、カとニホヒとの勢力が交替し始める時期であったと考えられる。

(8)(伯藏主)\さりながら、何やらかうばしひにほひがいたすが、何物をおいてだますぞ……はあ、わかねずみを油あげにしすまひておひたは、かゝつたが道理じゃ……(伯藏主)\まつはむまひかゞする……(狐)\いやこのかおりをかひでは、かゝつたが道理ぢや(虎明本・釣狐)〔表現社 1983〕〔狂言台本Ⅰ期〕
また、カが単独で〈－の意味〉を表す場合、5例中4例が韻文の用例である。和歌など音節数に制限のある場合に「1音節の名詞」が必要とされた結果、その条件を満たすカが選択されたに過ぎないのではなからうか。

(9)〈「なまなりを漬ける女」が〉心見にとて菊の花の美しきを敷きて、男のもとへ遣る。「なまなりの鮎をば五つ白菊の枝になりつゝぶらめくと見ゆ」男、知らず詠みに詠みける。「腐りつゝにほふがうへのなまなりは呉れける人のものゝかと見ゆ」(仁勢物語・十八)〔旧大系〕〔仮名草子〕

カは、ニホヒに交替され始めていく中で、「色との共起例」(全13例……カと読む可能性の高い“香”を含めると全20例)や、複合名詞・慣用的表現(全82例)が多く見られる。ニホヒやカカリにはほとんど見られないカ独自の固定的表現によって、その表現価値を維持していると考えられる。

(10)人品と言ふは、身躰よく、えりのあつい人と言ふにはあらず。縦合、身躰うすき人なりとも。其身やさしき心入れにて。魚をも香をも知りたる人。
(男色十寸鏡・下)〔霞亭文庫本 電子版〕〔浮世草子〕
前代では一時的に見えなかった、単独で〈－の意味〉を表すニホヒは16例得られた。

(11)女郎夜着の下より尻をつき出すを、不思議に思へば、其あたり響ほどの香ひ

ふたつまでこく所を火皿にて押えける。(好色一代男・巻五・七) [『新編西鶴全集本文篇 1』勉誠社 2000] [井原西鶴作品]

ニホヒは、単独で〈+の意味〉を表すものが 175 例と多いが、〈n/ーの意味〉を表すものもそれぞれ 32 例・16 例と少なからずある。近世前期において、ニホヒは〈+／n/ーの意味〉すべてを表す名詞として認識されていたと考えられる。

ところで、前代において既に雅語化していると推測されるカワリは 66 例得られた。ただし、このうち約 6 割に相当する 40 例が西鶴作品の用例である。西鶴は、同時代の他の言語資料であれば通常ニホフ・ニホヒを使用する箇所において、意図的にカナル・カワリを使用する傾向がある(池上 2011)。¹¹ こういった特定の資料における用例を除けばカワリの用例数はさほど多くなく、ニホヒのような日常語ではなかったと考えられよう。

3.5 近世中後期

前代に引き続き、〈n/ーの意味〉を表し得る名詞としてはニホヒが専ら使用されている。使用される資料ジャンルに偏りもなく、文体の制限はなかったことが窺える。近世中後期において、この語は〈+／n/ーの意味〉すべてを表す中心的名詞として、安定して使用されていたと考えられる。

(12)むすこ「ほんにおかしな^{にをい}匂で御座ります。」通り者「こりや死びとをやく匂だ。じやが、土手でかげば、死びとの匂も、匂みものじやないか。」
(遊子方言・発端) [旧大系] [洒落本]

(13)酒を温め、下物^{さかな}を列ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ其^{にほ}臭ひを嫌放るに似たり。(雨月物語・巻一・菊花の約) [旧大系] [読本]

上記の(13)では、単独で〈+の意味〉を表す古代のニホヒとは程遠い「臭」という表記になっている。単独で〈ーの意味〉を表すニホヒは、古文を真似た文語体資料においても使用されるほど、確実に定着していたのではなかろうか。¹²

単独で〈ーの意味〉を表すカは、近世前期では 5 例中 4 例が、近世中後期では 3 例中 2 例が韻文の用例である。これは、「和歌・俳諧など音節数に制限がある中で 1 音節語が必要とされる場合に限り、カは単独で〈ーの意味〉を表すこともあった」ことの結果であり、この意味・用法が当時のカの中心的名詞とは考えに

¹¹ 3.1 で「カワリには 1 例のみ、例外的に〈ーの意味〉を表す修飾成分を伴うものがある」と前述したのも、西鶴作品の用例を指す(全体表には含めていない)。カワリを多用する書き手の用例であることを踏まえれば、以下のような例は当時の一般的なこの語の意味・用法とは考えにくい。

「赤子泣たて、むつきのかほり、留伽羅の煙まけて、鼻つきてうたてかりき。」(色里三所世帯・巻一・四) [『新編西鶴全集本文篇 3』勉誠社 2003] [井原西鶴作品]

¹² 単独で〈ーの意味〉を表すニホヒに「臭」の字が使用されるのは、古代では大変稀少である。2010 年に改定された常用漢字表において「匂(ニオウ)の字、「臭」にニオウの訓が追加されたが、意味によるこの 2 字の書き分けは近現代のものにすぎないと言える。

く。単独で〈－の意味〉を表すカが残る 1 例は散文の滑稽本の用例ではあるものの、堅苦しい語り部分に使用されたカである。日常的な表現からは程遠い。

- (14) 「……いかにも彼撒屁漢先年兩國にては流行しかど、此度采女原へ出たれども、其後は聲もなく臭もなく今は世間に沙汰もなし。……」
(風来六部集・放屁論後編) [旧大系] [滑稽本]

カが〈－の意味〉を表す修飾成分を伴う 9 例を見てみても、この名詞が〈n の意味〉を表す名詞として口語の中で一般に広く使用されていたとは考えにくい。

- (15) 「……歌学を何んだと思ふたりや、葱ひともしの事んだはよ。ハテ鼻へ寄せしやかど臭いを洒落てかぶくと付た物。……」(猿丸太夫鹿卷毫・第一) [『竹本座浄瑠璃集 2』国書刊行会 1995] [浄瑠璃Ⅱ期]

- (16) いんきよ「ドレおかん見ましょかい。イヤこれは、けたいな香がする。ペツ／＼／＼、コリヤ酒がわるなつたのか、よもやそじやあろまい。ひとつ、おまいのんで見てくだんせ」トきた八へさかづきをさす 北八……へんなにほひのする酒だと、こゝろにおもひながら、むねをわるくして、なでさすり／＼ (東海道中膝栗毛・六編・上) [旧大系] [滑稽本]

全 9 例中、噺本Ⅱ期 4 例・人情本 1 例は文語体中の用例、近世雜Ⅱ期は 1 例が雅文体である『玉勝間』、もう 1 例は文語体である『四方のあか』の用例である。残る 2 例は挙例の(15)(16)で、(15)は洒落のためにカが使用されたに過ぎず、(16)は発話者が「いんきよ」、つまり老人である。さらに、(16)を読み進めると、老人の発話にカを使用しているのに対し、続く北八の心内文ではニホヒを使用しており、発話者によって使用する名詞を使い分けていることが分かる。近世中後期において〈n の意味〉として一般的に使用されるのはニホヒであり、〈n の意味〉で使用されるカはやや古めかしい印象を与えていたと考えられる。

カは〈n/－の意味〉を表す名詞としてはあまり使用されなくなるが、それとは対照的に、単独で〈＋の意味〉を表すものは前代に引き続き多い。また、「色との共起例」や、複合名詞・慣用的表現は継続的に使用されていることに注目したい。ニホヒの〈意味の下降〉と同時進行的に、カは独自の表現価値を維持し続け、単独では〈＋の意味〉を表す名詞として〈意味の上昇〉が生じたと見られる。

4 おわりに

古来〈＋/n/－の意味〉すべてを表していたカは、1 音節の不安定さゆえに単独では使用されにくくなる一方、複合名詞・慣用的表現としては継続的に使用され続けていた。その場合、カは〈＋の意味〉を表すため、1 語単独で使用される場合においても専ら〈＋の意味〉を表す語として認識されるようになっていったのであろう。そこで、カが本来担っていた〈n/－の意味〉領域をニホヒが担うようになったものと推測される。反対に、ニホヒがカの意味・用法領域を侵食し

ていく中で、カに特有の表現がこの語の活路となって、現代まで生き延び得たと見ることもできる。いずれにせよ、ニホヒの意味・用法の変化にはカの使用状況が大きく影響していたと考えられる。¹³嗅覚表現名詞の語彙体系の変化に特徴的なのは、1語がひとつの意味を表し、数語が意味領域を分担して語彙体系を構成するのではなく、ニホヒ1語が〈+／n／－の意味〉すべてを表すように変化していった点である。これは嗅覚表現自動詞も同様である(池上 2011)。

ところで、自動詞ニホフの〈意味の下降〉が生じる時期・定着する時期は、名詞ニホヒと同時期である。しかし、〈意味の下降〉の要因は自動詞と名詞とで異なる。ニホフは、嗅覚表現自動詞の語彙体系において「そもそも不在であった〈－の意味〉を表す語の必要性の高まり」に応えるため〈意味の下降〉が生じたと考えられる。ニホヒは、カと意味・用法を分担し共存していくために〈意味の下降〉が生じたと考えられる。ここであえて、「一方の〈意味変化〉がもう一方の〈意味変化〉を誘発した」と捉えるならば、ニホヒは本来ニホフの連用形であるので、「自動詞の〈意味変化〉に付随して名詞にも〈意味変化〉が生じた」と言うこともできるかもしれない。しかし、それとは別に、ニホフは嗅覚表現自動詞の語彙体系自体に、ニホヒは嗅覚表現名詞の語彙体系自体に、それぞれ〈意味の下降〉の要因が存していたことには着目すべきであろう。

引用文献

- 小野正弘(1984)「因果」と「果報」の語史—中立的意味のマイナス化とプラス化—
『国語学研究』24
- 工藤力男(2010)「におい彷徨—日本語雑記・二—」『成城文藝』210
- 小林隆(1984)「変化の要因としての語彙体系」『国語学研究』24
- 朱捷(1998)「匂」という字の由来及びそこからみる日本人の嗅覚と中国人の聴覚
『同志社女子大学日本語日本文学』10
- 池上尚(2010a)「嗅覚表現形容詞「カウバシ」の意味変化—“焦げるにおい”を表すようになるまで—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』18-1
- (2010b)「嗅覚表現形容詞「カグハシ」「カウバシ」「カンバシ」—近世以降における意味・用法の分担過程—」『国文学研究』162
- (2011)「嗅覚表現自動詞「ニホフ」の意味の下降について—「カラル」「クンズ」[名詞+する]との関連から—」『日本語学会 2011 年度春季大会予稿集』

— いけがみ なお 早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程 —

¹³ こうした言語の現象は、「語彙体系が弁別性と経済性の点で、要素間の調和のとれた姿をめざそうとする自律的な営み」(小林 1984)として捉えられる。

【表2】用例の得られたもの 調査には既刊の総索引・テキスト、早稲田大学中央図書館蔵本を利用した(詳細は池上 2010a・b, 2011 参照)。*要語索引による調査

【中古】【仮名散文Ⅰ期】伊勢物語,土左日記,大和物語,平中物語,宇津保物語,蜻蛉日記,落窪物語,枕草子,和泉式部日記,源氏物語,紫式部日記,栄花物語,浜松中納言物語,堤中納言物語,更級日記,狭衣物語【中世前期】【仮名散文Ⅱ期】讃岐典侍日記,大鏡,今鏡,とりかへばや物語,篁物語,松浦宮物語,無名草子,百詠和歌,源通親日記,たまきはる,十六夜日記,中務内侍日記,徒然草,竹むきが記,とはすがたり,増鏡【説話】今昔物語集,古本説話集,打聞集,唐物語,発心集,宇治拾遺物語,閑居友,今物語,撰集抄,十訓抄,古今著聞集,沙石集,親鸞集三帖和讃,日蓮聖人遺文,梅尾明恵上人伝記【和漢混淆文Ⅰ期】雲州往来,方丈記,保元物語,平治物語,平家物語,海道記,源平盛衰記【中世後期】【和漢混淆文Ⅱ期】曾我物語,太平記,信長公記【室町物語】あしびき,寝寝草紙,しぐれ,鴉鷲物語,岩屋の草子,かざしの姫君,高野物語,毘沙門の本地,猿の草子,師門物語,さゝやき竹【抄物・キリシタン資料・狂言台本】*漢書抄,*百丈清規抄,*史記抄,*古文真宝桂林抄,*古文真宝彦龍抄,*山谷抄,湯山聯句抄,*蒙求抄,*荘子抄,*毛詩抄,*四河入海,中興禪林風月集抄,句双紙抄,中華若木詩抄,天草本伊曾保物語,天草本平家物語,天草本金句集,ぎやどべかどる,天正狂言本【近世前期】【狂言台本Ⅰ期】虎明本,天理本,虎清本,和泉家古本,忠政本,統狂言記【仮名草子】恨の介,大坂物語,竹斎,薄雪物語,尤之双紙,伊曾保物語,仁勢物語,難波物語,是樂物語,為愚痴物語,ねごと草,浮世物語,たきつけ草もえくろ けしすみ,元の木阿弥,難波鉦,都風俗鑑,名女情比,好色袖鑑,酒茶論【浮世草子】好色訓蒙図彙,好色貝合,男色十寸鏡,好色破邪顯正,好色通變歌占,好色万金丹,新色五卷書,けいせい色三味線,傾城禁短気,世間娘気質【噺本Ⅰ期】『噺本大系 1~7』東京堂出版 1975・76(資料名の詳細は省略)【井原西鶴作品】好色一代男,難波の兒は伊勢の白粉,諸艶大鑑,好色一代女,好色五人女,男色大鑑,武道伝來記,懷硯,日本永代蔵,武家義理物語,嵐は無常物語,色里三所世帯,好色盛衰記,本朝松陰比事,一目玉銚,新吉原つねづね草,世間胸算用,浮世栄花一代男,西鶴置土産,西鶴織留,西鶴俗つれづれ,万の文反古,西鶴名残の友,俳書・発句その他【浄瑠璃Ⅰ期(近松)】津戸三郎,十二段,日本西王母,用明天王職人鑑,堀川波鼓,五十年忌歌念仏,孕常盤,吉野都女桶,夕霧阿波鳴渡,長町女腹切,大経師替曆,嘉平次おさが生玉心中,国性爺合戦,博多小女郎波枕,平家女護嶋,双生隅田川,女殺油地獄,信州川中島合戦,浦島年代記【近世雜Ⅰ期】女重宝記,ひとりね【俳諧Ⅰ期】犬子集,毛吹草,芭蕉文集・句集,風俗文選【近世中後期】【浄瑠璃Ⅱ期】心中恋の中道,八百屋お七,猿丸太夫鹿卷毫,ひらかな盛衰記,神靈矢口渡,桂川連理柵,伽羅先代萩,道中亀山噺,新版歌祭文,鎌倉三代記,蝶花形名歌島台【狂言台本Ⅱ期】保教本,伊藤源之丞本,名女川本,虎寛本,虎光本,雲形本,賢通本【談義本】艶道通鑑,田舎荘子,風俗文集 昔の反古,当世下手談義,風流志道軒伝,根南志具佐,根無草後編,当世穴さがし,遊婦多数寄,成仙玉一口玄談【噺本Ⅱ期】『噺本大系 7~19』東京堂出版 1975・79(資料名の詳細は省略)【近世雜Ⅱ期】交隣須知,癩癩談,玉勝間,道二翁道話,膽大小心録,山中人饒舌,花月草紙,鳩翁道話,玲瓏隨筆【洒落本】遊子方言,卯地臭意,つれづれ酔か川,傾情知恵籠,殘座訓,通言総籙,青楼昼の世界錦之裏,傾城買二筋道【黄表紙】莫切自根金生木,大悲千祿本,江戸生艶氣樺燒,心学早染艸,敵討義女英,賢愚湊銭湯新話,仙術独稽古【読本】雨月物語,椿説弓張月【滑稽本】風来六部集,東海道中膝栗毛,戲場粹言幕の外,浮世風呂,大千世界楽屋探,七偏人【人情本】春色辰巳園,春色梅兒善美,貞操婦女八賢誌,春色恵の花,花の志満台,いろは文庫,閑情末摘花,清談若緑,春色恋染分解【俳諧Ⅱ期】蕪村句集,小林一茶句,鴉衣,誹風柳多留

表3 全体表

語	名詞													複合名詞・慣用的表現			「色」との共起			
	カ			ニホヒ			カヲリ		香					色香	移リ香	梅ガ香	カ	ニホヒ	香	
	単独	修飾成分		単独	修飾成分		単独	単独	修飾成分		単独	修飾成分								単独
意味・用法	+	+	-	-	+	+	-	-	+	+	+	+	-	-						
資料ジャンル	+	+	-	-	+	+	-	-	+	+	+	+	-	-						
仮名散文Ⅰ期	64(24)	32(2)	1	5	189(32)	45	2	0	31	17	8	2	1	0	2	20	0	6	1	1
中古計	102(26)			236(32)			48		11					22						
仮名散文Ⅱ期	18(9)	3			130(19)	17(1)	3		7(1)	5	3(1)	2			1	6	5	3	4	1
説話※1	6(3)	4	3		37(8)	13		1	2		27	37	24	10	3	3		3	3	
和漢混淆文Ⅰ期※2	8(5)		1		29(2)	2					4				1	4				
中世前期計	32(17)	7	4	0	196(29)	32(1)	3	1	9(1)	5	34(1)	39	24	10	5	13	5	6	7	1
	43(17)			232(30)			14(1)		107(1)					23						
和漢混淆文Ⅱ期	9(3)				22(2)	1									1	2	3	2		
室町物語	1				18(1)											4				
抄物・キリシタン資料・狂言台本	7(2)	1			14(1)	3	3		3		28(4)	2(1)			3	2		1		
中世後期計	17(5)	1	0	0	54(4)	4	3	0	3	0	28(4)	2(1)	0	0	4	8	3	3	0	0
	18(5)			61(4)			3		30(5)					15						
狂言台本Ⅰ期	5(4)				11(2)	2			1		2(2)									
仮名草子	15(2)	1	1	2(1)	15(1)	6	2	2	3	2	4				13	5	1	5		4
浮世草子	12				14(10)	1	4	6	6(1)	1					1	2		3	1	
噺本Ⅰ期	13(6)		3(1)	1(1)	28	2	2	2	3	1	6			1	5	3	2			1
井原西鶴作品	22(10)				29(8)	3	1	5	37(2)	3	1				10	7	1	1		
浄瑠璃Ⅰ期(近松)	7(5)				5(3)	1			2(2)		1				6	2	5	1	1	1
近世雑Ⅰ期			1		13	1	4	1	2		2				2					1
俳諧Ⅰ期	39(36)			2(2)	60(50)	2	1(1)		5(4)		5		1		6		11	3		
近世前期計	113(63)	1	5(1)	5(4)	175(74)	18	14(1)	16	59(9)	7	21(2)	0	1	1	43	19	20	13	2	7
	124(68)			223(75)			66(9)		23(2)					82						
浄瑠璃Ⅱ期	5(1)		1		10(2)			2	2(1)		1				4	2	3			1
狂言台本Ⅱ期	9(8)				27(7)	6	2	3			11(3)	7						1		
談義本	5(1)				11	2	2	2	5	1	3				7		2			1
噺本Ⅱ期	5(1)		4		28(1)	5	5	2	5	2	2				1		3			1
近世雑Ⅱ期	10(1)	2(2)	2		16(2)	4(2)	2	5	5		14		1	2	2		4			
洒落本					6		1	5	4		1									1
黄表紙	1				3	3	3			1					4					
読本	2				1			1	1											
滑稽本	3(1)	1	1	1	8(1)	4	9	2	1											
人情本	14(3)	1	1		8(3)			1	6(1)	1					14	2	9	4		
俳諧Ⅱ期※3	28(28)			2(2)	9(7)	2	1	2(1)	9(1)	1	6(1)	1			3	1	33			3
近世中後期計	82(44)	4(2)	9	3(2)	127(23)	26(2)	25	25(1)	38(3)	6	38(4)	8	1	2	35	5	54	5	1	7
	98(48)			203(26)			44(3)		49(4)					94						
総計	308(153)	45(4)	19(1)	13(6)	741(161)	125(3)	47(1)	42(1)	140(13)	35	129(11)	51	27	13	89	65	82	33	11	15
	385(164)			955(166)			175(13)		220(11)					236						

※1 宗教関係資料を含む。 ※2 漢文訓読文資料含む。 ※3 川柳を含む。